2009年度財団法人 東洋文庫事業報告書

財団法人 東 洋 文 庫
理事長 槇 原 稔

2009年4月1日から2010年3月31日までに行われた財団法人東洋文庫事業報告の概要は下記の通りです。

事 業 項 目

Ⅰ 調査研究……2
Ⅱ 資料収集・整理……9
Ⅲ 研究資料出版……10
Ⅳ 普及活動……11
Ⅴ 学術情報提供……12
Ⅵ 地域研究プログラム……15
Ⅶ 受託研究……16

Ⅰ. 調査研究

以下の研究活動を実施した。

A. 超域アジア研究

超域アジア研究部門

(1)現代中国研究班

「現代中国の総合的研究(2)」

現代中国は、政治、経済、社会の大改革を行い、その影響力は東アジアから広く世界に及びつつある。この動態を、歴史・文化の要因をも視野に収めながら、総合的に捉える研究体制(資料、政治、経済、国際関係・文化の各グループで構成)を構築した。資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点としつつ、学際的研究と公開利用に向けて拡充と再編をはかる。その際、台湾中央研究院や中国社会科学院、ハーヴァード燕京研究所との学術交流など、海外・国内の研究機関との連携をいっそう強化し、政治、経済、国際関係・文化グループは研究会の開催を継続実施し、次年度以降における成果の刊行に備える。

[研究実施概要]

a) 資料グループは、東洋文庫が所蔵する近代中国関係資料の中心をなすモリソン・パンフレットを整理し、系統的な調査・研究を進めた。また、目録の Web 公開にむけた準備作業を行った。

b) 政治グループは、前年度までの研究を継続・発展させ、現在の中国が直面する持続的発展可能性のある経済・社会発展に対応する政治課題を解明するため、定期的に研究会を実施した。

c) 経済グループは、現代中国経済の構造変動に関するこれまでの共同研究の成果をまとめ、『歴史的視野からみた現代中国経済』を出版した。また、南京大学に保管されていた、戦前の中国農村調査の基礎データ(ロッシング・バック資料)を、広く利用可能なデータとして東洋文庫に収蔵する作業を継続した。

d) 国際関係・文化グループは、日中戦争期に続き、1950年代の中国の国際関係と社会・文化変容の関連に関する共同研究を継続した。日本、中国、台湾などで新鮮な研究成果が続出する分野であるため、研究成果と新出資料を鋭意、東洋文庫に収集しつつ、研究会活動を展開した。

e) 政治グループ、経済グループ、国際関係・文化グループとも、図書資料の購入に関しては、東洋文庫の現代中国研究資料センターと提携して、系統的な収書を行った。

(2)現代イスラーム研究班

「現代イスラームの超域的基礎研究

－議会主義の展開と立憲体制に関する一次資料の収集と比較分析研究－」

世界の近現代イスラーム研究において、これまでほとんど用いられることのなかった中東諸国の議会文書(アラビア語、ペルシア語、トルコ語)を収集・整理・分析し、それぞれの地域(国家)に誕生した議会主義の政治思想と立憲体制の実態を比較・検討する。2009年度からは、新たに中央アジア諸国を比較の対象に加え、基本資料の収集と整理・分析を行う。これによって中東・中央アジアなどのイスラーム地域における国民国家の歴史的役割と今日的意義を一次資料にもとづいて総合的に考察する。他方、イスラーム関係資料の収集と整理、データベース化を推進し、日本における資料センターとしての充実をはかる。

[研究実施概要]

現代イスラーム研究班の活動は、資料の性格に対応してアラブ、イラン、トルコ、中央アジアの4グループに分かれて実行される。アラブ、イラン、トルコグループの研究は、第1期(2003年～2008年)の実績を踏まえて実施された。各グループの研究実施概要は以下の通りである。

a) アラブグループ:2006年度刊行の*A Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt* を利用して、議会文書の解読・分析を進めた。

b) イラングループ：2005年度に作成した議会文書のインデクス（CD-Rom版）を利用して、議会文書の分析を進めた。
c) トルコグループ：2006年度刊行の論文集『トルコにおける議会制の展開』を基礎に、関係資料の収集と議会文書の解析を進めた。
d) 中央アジアグループ：研究の初年度に当たり、関係資料の収集と整理を行った。

各グループとも年3回程度の研究会を開催した。また、年度末には合同研究会を開いて用語・訳語の検討を行うと共に、4分野間の比較分析を行った。なお、中国・日本の議会制・立憲制の専門家を招き、比較のための報告を得た。

B. アジア諸地域研究

1. 東アジア研究部門

（1）前近代中国研究班

①「古代地域史研究－『水経注』の分析から－（2）」

本研究班では地域史という視点から、中国古代の地域社会の構造を検討してきた。その基礎となるのは『水経注』（原典6世紀、中国最古の地理書）とその諸注の再検討である。これを注文、疏文まで精読し、加えて考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析するという歴史地理学的な方法による研究に挑んでいる。また流域の古代遺跡と『水経注』記載の内容を合わせて検討することで、歴史的自然環境・社会的実態を具体的に理解し、流域の地域社会の構造の変化を明らかにしていく。刊行を予定している『水経注疏訳注』渭水篇下巻及び洛水・伊水篇訳注もこれらの成果を反映させたい。渭水下流域及び洛水・伊水流域は「黄河文明」の中心地である。ここを「地域史」という観点から分析することは中国古代史研究においては新鮮な視点であり、『水経注』の研究という範疇を超えて、内外における中国古代史研究の新たな展開となる研究を目指している。

［研究実施概要］

a) 陳橋驛復校『水経注疏』（江蘇古籍出版社刊）をテキストとし、渭水篇（巻19）の講読を隔週の研究会において継続実施した。すでに公刊した渭水篇訳注上巻に続き、下巻（巻19の訳注）を20102年度に刊行する。
b) 『水経注』洛水・伊水篇訳注の刊行準備として、渭水下流域及び洛水・伊水流域の地誌的記述及び考古学的調査・発掘報告の収集のため、台湾および山西省における調査と学術交流をおこなった。特に山西省では、現地で実際に発掘に従事している研究者・研究機関との学術交流や実地調査を実施し、流域の古代遺跡の実態を把握した。

②「宋代社会経済史用語解集成の作成とその電子辞典化」

本グループがこれまでに作成・公刊した『宋史食貨志訳註（一）～（六）』（東洋文庫刊、1960年～2006年）、および『宋会要輯稿・食貨篇・社会経済用語集成』（東洋文庫刊・2008年）における訳註および用語の収集の成果をベースとして、整理と増補を加え、広範囲かつ多方面の利用者の便宜に適合するような冊子体およびCD-ROMの用語解説集を作成し、研究活動のいっそうの発展に資するプロジェクトである。

［研究実施概要］

a) 中国社会経済史関係の語彙を関係資料から抽出・整理する作業をほぼ終了した。全用語は、（イ）財政用語（23項）、（ロ）経済用語（10項）、（ハ）社会用語（11項）の計54項に大きく分類して、解説を記述する作業を継続している。成果は、2011年度に冊子体として公刊する。
b) 宋代社会経済関係の用語解説辞典を目指す本研究では、最善・網羅的な一次資料、各種工具書、既刊から近刊にいたる二次文献類の収集・常備が欠かせない。一次資料の中では、台湾中央研究院作成の校訂と標点を施した「新漢籍全文資料庫」に収まる典籍の活用するほか、「判語」「官箴」「筆記」「方志」の類、あるいは明清・民国時代の民間契約文書集成等の資料を東洋文庫に備え、研究内容の充実に備えた。

③「東アジア都城の考古学的調査・研究(3)」

本研究班では、渤海を中心として東アジアにおける都城の比較研究を行ない、その研究成果として2004年度に『東アジアの都城と渤海』(全394頁)を、2006年度に『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を公刊した。しかしその中心となる渤海上京龍泉府址(東京城)出土遺物の調査・研究は、予想以上に多数の遺物があったため、一部の遺物の調査・研究については、2009年度以降においても継続実施する。

[研究実施概要]

a) 中国吉林省琿春市所在の八連城(渤海の東京龍原府に疑定されている)に関する発掘報告書の内容を検討した。

b) 中国渤海仏の写真撮影をおこない、参考資料として整備した。

④「前近代中国民事法令の変遷」

宋代以降の戸婚・田土・銭穀などを扱う「民事」法令を分析し、どのように変遷してきたかを明らかにする。中国の各時代の様々な法についての研究の中でも、近20年の特徴のひとつとして、法令の有効性、厳格性などを版牘文や契約文書によって検討する研究がなされてきたことがあげられる。契約文書や多くの条例、版牘文などが発見され、また中国国内にあるものが利用しやすくなったことにもよろう。本研究班も過去5年間、この方向で研究活動をしてきた。この5年間の研究をとおして、あらためて法令そのものに視点をあてることが必要であることに到った。民事的な法令に限ったのは、社会状況を反映しやすく、社会の実態の変化を分析するに適していると見ているためである。一度できた法は常に現実社会に適合しにくくなってゆくが、時代を通して考察することにより、漢族社会の大きな変容をつかむことができると考える。

[研究実施概要]

a) 宋・元・明・清期の条例収集を進めた。

b) 収集した条例の整理、解読を行うべく定期的に研究会(メンバー以外の研究者も含める)を開き、内外の研究者との意見交換を行った。

(2)近代中国研究班

「20世紀前半日本の中国調査」

本研究は、近代中国研究班が、それ以前の近代中国研究委員会時代から引き継いで行ってきた研究で、1910年代から40年代にかけて日本の諸研究調査機関が、華北を中心とする中国で実施した調査活動に関する資料収集とその分析を継続するものである。従来の日本側資料に加え、本研究では中国側資料の検討も行い、華北を重点としながらも、地域的特質を検討するために、華中南を含めて全国的規模に調査地域を拡大する。そして日本側および中国側資料の活用について、近年の研究成果を踏まえながら、新たな視点から再整理をはかり、20世紀前半期の中国社会の全体像を考察する。さらに戦前・戦中期の日本の研究機関等による中国実態調査資料の収集を継続するとともに、中国の研究機関等との共同研究を発展させる。過去に、中国社会科学院、上海市档案館、青島市社会科学院、山東社会科学院などとの共同研究により、日本国内外に散逸していた近代中国研究にとって必要不可欠な資料の収集を実施してきた。本研究では、新メンバーの加入を契機に、交流拠点を北京大学や南開大学、山西大学および南京大学等に拡大し、中国近現代史に関する重要資料の散逸を防ぐためにも、東洋文庫に資料を蓄積し、その分析を進めて目録・解題等を作成し、日中両国の共同研究を発展させる。

[研究実施概要]

a) 日本および中国両国に現存する日本の中国経営に関する資料を、継続的に収集した。

b) 過去の研究ではとり上げられなかった調査機関、例えば各地の日本領事館、および商工会議所等の報告書類に関する資料を、日本では東洋文庫の他に、外務省外交史料館、農林水産省農林水産政策研究所、防衛省防衛研究所図書館等において調査した。

c) 調査の成果を一部を収載し、『近代中国研究彙報』32号を刊行した。

(3)東北アジア研究班

①「日本所在近世朝鮮文献資料研究(2)」

京都大学附属図書館、天理大学附属図書館今西文庫をはじめ、日本各機関・個人が所蔵している、2004年度以来継続してきた朝鮮近世の記録類の第2次調査を行い、解題目録の完成を期する。従来、近世朝鮮のいわゆる朝鮮本と言われる古典籍については、総合的な調査が進行し、ある程度その全貌が解明されてきた。しかし主として成冊と言われる、帳簿を中心とした、地方資料・民間資料などの記録については、全体的な調査がほとんど行われてこなかった。第1次調査では、すでに原地に残存が確認されていない資料を発見し、内容分析を行ってきた。第1次調査と今回の第2次調査によって、ほぼ日本における該当資料は悉皆的な調査を行うことができる。

[研究実施概要]

a)『日本所在近世朝鮮記録類解題Ⅱ』刊行のための準備作業を進めた。

b) 調査資料の分析により、韓国所在資料と合わせて、近世記録類の全貌について調査を進めた。

c) 該資料の日本への将来経緯について調査を継続した。

②「清朝満洲語檔案資料の総合的研究(2)」

清代の第一公用語である満洲語は、清初ばかりでなく、清朝一代にわたって用いられた言語である。18世紀の乾隆帝代より、京師に暮らす旗人たちは、日常語として漢語をもちいるようになっていったが、文章用語としての満洲語は、民国にいたるまで継続して利用された。現在、北京・中国第一歴史檔案館には、約1千万件の文書資料が保存されているが、その半分は、満洲語(または漢語とのいわゆる合璧)によって記されたものである。このことは、清代の文書伝達体系全体において、満洲語の利用が不可欠であったことを示している。とくに入関前(1644年以前)および清初の時期の文書・書籍、ならびに旗人、藩部をはじめとする辺境地方、そして対外関係等の文書において、多くの場合満洲語が用いられている。本研究は、これら満洲語で記された、または場合によっては印刷された清代の文献資料について、清初期を中心として総合的に検討を加えようとするものである。

[研究実施概要]

a) 本研究班は、すでに50年以上にわたって、満洲語文献の研究をすすめ、『満文檔案』訳注(I～VII)、『旧満洲檔』訳注(1,2)、『鑲紅旗檔』(雍正朝、乾隆朝1, 2)をはじめとするさまざまな成果を公表し、世界の研究者より高い評価を受けてきた。この研究伝統の上に、今回は、清初の「内国史院」関係文献の研究を実施する。

b) 中国第一歴史檔案館が所蔵する満洲語資料「内国史院檔」のうち、天聡、崇徳年間の文書について読解をすすめ、具体的な検討を加えた。

c) 「内国史院檔」とともに、『鑲紅旗檔』の研究も併せて実施した

③「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析(2)」

中国では北京オリンピック開催準備をめぐる国家事業が急進するなか、それまで内在していた政治・経済・民族・文化問題がチベットをめぐる自治区の問題に端を発して表面化し、その影響は広く中央アジア・北アジア領域世界にも及んだ。そこには、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を進展させた清朝の最大版図が直接に現代中国と繋がるなか、その一体化から生じた政治・経済・民族・文化の問題も現代中国に直結していた反映と捉えられる特徴が多々窺える。本研究班では、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を独自に進展させた清朝の国家領域構造と対外関係の問題を総合的に研究・分析してきた。刊行予定の英文論文集にその成果を反映させると共に、引き続き清代東アジア・北アジア諸領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築するべく、清朝の国家領域構造と対外関係を分析する上で不可欠な檔案(公文書)類のうち、保存収蔵状況が未詳な檔案類を中心に体系的に蒐集、整理、デジタル化し、向後の研究に貢献することを目的とする。

[研究実施概要]

a) 英文論文集(TBRL14:*The Historical Structures of Eastern and Northern Asia in*

the Qing 清 Dynasty Era.)の編集作業を進めた。

b) 既成の領域世界・時代区分の枠を越え、海外における図書館・檔案館・研究機関などに所蔵されている檔案文献史料類についての調査を継続した。

(4)日本研究班

「岩崎文庫貴重書の書誌的研究(2)」

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分にはなされていない。平成18年までに室町時代以前に成立した古写本・古版本についての書誌解題(Ⅰ～Ⅴ)を公刊してきたことを受けて、ひき続き近世の成立ないしは刊行の貴重書を調査して研究の基盤を整備するとともに、その成果を広く公開することをめざしている。

[研究実施計概要]

a) 岩崎文庫の中でも万葉集関係のものを中心とする木村正辞旧蔵書約100点について、その資料群の全体像を把握し、『岩崎文庫貴重書書誌解題VI』として公刊した。

2. 内陸アジア研究部門

(1)中央アジア研究班

①「サンクトペテルブルグ所蔵古文献の研究－ウイグル文を中心として－」

東洋文庫が入手したサンクトペテルブルグの東洋学研究所のマイクロフィルムのうち、ウイグル語とソグド語については『東洋文庫所蔵St.Petersburgウイグル文字・ソグド文字・マニ文字写本マイクロフィルム仮目録[第1稿]』として、初期の現地での実見データの一部を取り込んだフィルム番号整理一覧を、2002年に刊行した。その後、マイクロフィルムのデータを昨年までのプロジェクトでデジタル整理を続けた。ほぼ完成に至った目録の改訂版を原稿とし、冊子かデジタルデータの形で編集し直して刊行することは、内外研究者の要望に沿うことになる。ただし、東洋文庫と東洋学研究所の初期の契約の制約があるため、その刊行方法については慎重に検討をおこなうものとしたい。ついては、ウェブ上に未公開のものを含む大英図書館蔵のウイグル文字文献の一覧表などと合わせて刊行する可能性も検討したい。その中から、文書研究の成果についての論文をこれに付すこととする。

[研究実施概要]

a) 従来の研究テーマによって蓄積された目録整備をベースとして文献研究を開始した。

b) 古ウイグル文を中心とする文献の書式整理を通して分類作業を行った。

c) 漢文との合璧文献を中心として、2－(1)－③「漢語文献」グループとの協同研究をおこなった。

d) 古ウイグル文献の個別読解・同定研究を継続した。

②「近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと政治権力」

ソ連解体(1991年)以後、中央ユーラシア近現代史研究は、大きく可能性が開かれた。これまでアクセスが不可能であった多種多様な史料が公開され、また現地の研究者との共同研究や外国人研究者による現地調査も可能になったことは、決定的な意味をもっている。こうした中で、本研究は次の2点を課題とする。

第一に、8世紀以降の中央アジア史を考えるとき、その政治と社会、文化においてイスラームが果たした役割を無視することはできないが、ソ連時代は無神論イデオロギーのためにイスラームに関わる問題は不当に軽視されてきた。いま新たな中央アジア史を再構成しようとするならば、この点を克服することが不可欠である。

第二に、ペレストロイカ以降、中央ユーラシア地域においてはイスラームの復興が顕著であり、イスラーム国家の樹立を目標とする急進派は、世俗主義を掲げる政権との間に鋭い緊張関係を作り出している。このような現代のイスラーム復興主義は、中央ユーラシア史の文脈においてどのように考えるべきだろうか。それには、近現代史におけるイスラームと政治権力との相互関係を実証的に検討することが不可欠である。

［研究実施概要］

a) 海外における史料収集：研究協力者を派遣し、タシュケント（ウズベキスタン）、カザン、サンクトペテルブルク（ロシア）などの図書館や研究機関のほか、各地の民間に所蔵されている史料の収集を行った。

b) 史料の整理と分析：これらの史料のうち、とくに定期刊行物についてはデジタル化によって幅広い利用ができるようにし、文書史料については目録作成を進めた。

c) 研究の推進：これらの新規収集史料と東洋文庫の蓄積してきた豊富な文献資料とを活用し、研究会の開催などを通して、上記の課題に関する研究を推進した。

d) これまでの研究成果を、TBRL12 *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20th Centuries* として刊行した。

③「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土漢語文献マイクロフィルム目録のデータベース化」

2002年に東洋文庫が世界にさきがけて入手した東洋学研究所の内陸アジア出土文書マイクロフィルム（全363リール、約25万齣）には、4、5世紀から15世紀に及ぶコータン・サカ語、西夏語、チベット語、ウイグル・ソグド語、漢語、チャガタイ・トルコ語、サンスクリット語、アラビア語、ペルシア語、満洲語、モンゴル語の11言語の文書が含まれている。このフィルム資料の目録をデータベース化してそれを公開することは、わが国だけでなく、諸外国の研究機関・研究者の希求するところ切なるものがある。

本研究は、上記フィルムの中からとくに漢語文献を抽出してそのフィルム目録のデータ化を図るとともに内陸アジア出土漢語文献の特性を明らかにすることを目的とする。

［研究実施概要］

a) ウイグル・ソグド語文書、計30リール（Reel 2、Reels 17～44、Reel 47）に含まれている漢語文献（約1100齣）のフィルムについて、目録作成を継続した。

b) 上記の文書について、前に抽出した51リールの漢語文献と記載様式等による比較研究を行った。

c) 以上の研究活動を継続するため、定期的に「内陸アジア出土古文献研究会」を開催した。

（2）チベット研究班

「チベット蔵外文献の書誌的研究（2）」

チベット研究班においては、新たに発見された写本を中心とするチベット語資料を収集・保管し、歴史・文化・宗教の各分野にわたるチベット語文献の体系的網羅的なコレクションの充実をはかることを目的とする。収集した資料については目録化を行い、データベースとして公開すると同時に、敦煌チベット語文献、河口慧海将来文献などとともに東洋文庫所蔵チベット語蔵外文献として写本校訂と訳注研究を行い、電子データベースあるいはシリーズ刊行物として公開する。以上の3点により、世界的なチベット学の研究拠点として高い貢献を目指すものである。

［研究実施概要］

a) 資料収集：近年中国で新たに発見された10～13世紀のチベット語写本の影印版収集を進めた。チベット語大蔵経文献、蔵外文献の電子版を参考資料として購入し、研究に備えた。

b) a)によって収集した資料の分析と目録作成を行った。

c) チベット人研究協力者の協力のもとに、以下の研究を行った。

1. 筆記体写本の校訂：古いチベット語写本の多くは手書きの筆記体で書かれており、一般研究者には解読が難しいものがある。それらをチベット人協力者の指導を得て校訂し、活字体テキストデータベース作成を進めた。
2. 1のデータベースをもとに文献の分析・研究を行い、新たに写本研究シリーズを立ち上げて、成果を刊行するため、準備作業を行った。
3. 『西蔵仏教宗義研究』シリーズの続刊として、トゥカン『一切宗義』カダム派の章の訳注研究を刊行するため編集作業を進めた。
4. 敦煌チベット語文献の研究を行い、武内紹人研究員を中心に、『スタイン蒐集チベット語文

献解題目録』に続く新たな敦煌文献研究シリーズを立ち上げ、成果を刊行するため準備作業を行った。

3．インド・東南アジア研究部門

（1）インド研究班

「インド刻文史料の蒐集と研究」

インド（南アジア）の刻文研究は、これまでわが国でごく僅かな研究者しかいなかったが、近年、ドラヴィダ系言語について石川寛、太田信宏、アーリヤ系言語について三田昌彦、古井龍介といった若手研究者が育ってきた。刻文は、「史書なきインド」の古代・中世史研究においての根本史料であるにもかかわらず、そのようなこれまでの状況から、わが国においては、テキストおよび研究書の蒐集が充分とは云えない。

他方、インド自体での刻文研究は、テキストの出版が遅れていることと、若手研究者が育たないことによって、危機的な状況にあるとさえ云いうる。また、世界的にも、インド刻文の研究者数は、極めて少ない。

そのような状況に鑑み、わが国の研究機関において、未出版のものをも含めてインドの刻文史料を蒐集し、それを国際的に公開しながら、わが国の新しい研究者の力を結集して、インド古代史・中世史の研究進展を図ることは、わが国のインド研究に課せられた急務と云えよう。

［研究実施概要］

a）東洋文庫に所蔵のない刻文史料集、刻文研究誌のほか、インド独立後の新しい出版物（とくに、州政府考古学局の）の収集を進めた。

b）研究については、個々の研究者が独自の研究を行うと同時に、研究班メンバー全員およびインドの研究協力者が共同でなしうる幾つかのテーマを設定して行った。

c）これまでの成果をとりまとめ*Sources on the Mughal History*を刊行した。

（2）東南アジア研究班

「近現代東南アジアに関する史料研究」

近代日本と東南アジアは、明治期の後半から緊密な関係を有し始め、第二次世界大戦期に日本は東南アジアを軍事占領した。また戦後日本は、東南アジアと緊密な経済関係を形成するに至っている。こうしたなかで日本の東南アジア研究も、この40年間に飛躍的な研究の発展をとげた。ただし日本の東南アジア研究は、第二次世界大戦後にいきなり始まったわけではない。すでに大正期より東洋史の東西交渉史の一分野として南洋史が注目を浴び、また南洋ブームの高まりとともに経済関係の文献も出版されていた。そして第二次世界大戦期には、翻訳本も含め多数の東南アジア関係の文献が出版された。これらの文献は、一部の実証研究を除いて、学術的にあまり注目を浴びてこなかった。しかしそれらは、日本の東南アジア観を検討するためのみならず、東南アジア社会を考察する上においても、重要な資料となりうる。本研究は、従来力点が置かれた日本の東南アジア関与という観点からのみならず、当時の東南アジアの社会統合に果した日本人の役割の視点からその記述を検討し、日本人をはじめ中国人やインド人さらにはアラブ人や欧米人など多様な人々が居住した近代東南アジア社会の特質について研究する。

［研究実施概要］

a）近代移行期の東南アジアの港市に関する文献資料の収集と分析を行なった。

b）研究会を開催し、て文献調査や訪問調査の成果をもとに議論の構築を進めた。

4．西アジア研究部門

西アジア研究班

「イスラーム世界における契約文書の研究(2)」

ワクフ（宗教的寄進）は、都市や農村の宗教施設を建設するだけでなく、経済基盤となり、政治権力者、名士、民衆の結びつきをつくった。ワクフに関わる、法学書、年代記、地理書などの叙述史料とワクフ寄進文書や調査台帳などの文書史料を収集し、諸地域における実態と歴史的変容を解明する。

［研究実施概要］

a) ヴェラム文書（モロッコの契約文書、東洋文庫所蔵）の研究を実施し、ワクフ研究を本格的に開始した。

b) 上記について、資料収集、現地調査、国内研究会を実施した。

C. 資料研究

資料研究部門

東アジア資料研究班

「東アジア資料の研究」

中国、台湾、香港、東南アジア華人社会などに所蔵される文献資料の探索、各国図書館との国際的情報交換・資料交換・人的交流を目指す。

［研究実施概要］

a) 台北の中央研究院歴史語言研究所との資料交換協定にもとづいて提供される漢籍全文資料庫（Data Base）の交換資料として20,000コマのマイクロフィルムを提供した。

b) 南京大学と研究交流を行い、兪爲民氏、孫蓉蓉氏を招聘した。

c) これまでの研究成果をまとめ、『中国近世文芸論―農村祭祀から都市芸能へ』を刊行した。

D.各種研究会・講演会開催

数量／月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
研究会数	8	9	7	9	3	7	10	14	8	9	11	9	104
参加人数	57	91	59	83	19	64	80	104	65	104	88	136	950

Ⅱ. 資料収集・整理

A. 資料購入

超域アジア研究、アジア諸地域研究資料研究において必要とされる一次資料を中心に購入を進めた。購入冊数は別添資料の通りである。

B. 資料交換

国内外各提携機関との間で資料交換を進めた。

区　分	受　贈			寄　贈		
	和漢書	洋　書	計	和漢書	洋　書	計
単行本	850冊	114冊	964冊	1,140冊	1,000冊	2,140冊
定期刊行物	2,641冊	672冊	3,313冊	3,000冊	907冊	3,907冊
計	3,491冊	786冊	4,277冊	4,140冊	1,907冊	6,047冊

C. 図書・資料データ入力数

2009年4月1日～2010年3月31日までの期間における、新収および蔵書遡及のDB入力数は、下記の通りである。

洋　書	732	トルコ語図書	189
和漢書（含む・中国語）	3,243	南アジア諸語図書	45
キリル語図書	46	雑誌ほか	4,862
ペルシア語図書	156		
アラビア語図書	267		
		合計	9,840件

D. 資料保存整理

2009年4月1日～2010年3月31日までの期間における、補修再製本・製本作業は、下記の通りである。

・マイクロフィルム劣化防止作業　2,660件
・マイクロフィルム整理作業　1,037件

Ⅲ. 研究資料出版

A. 定期出版物刊行

1.『東洋文庫和文紀要』(東洋学報)　第91巻第1～4号　A5判　4冊(刊行済)

2.『東洋文庫欧文紀要』(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*)　No.67　B5判　1冊(刊行済)

3.『近代中国研究彙報』　32号　A5判　1冊(刊行済)

4.『東洋文庫書報』　第41号　A5判　1冊(刊行済)

5.『超域アジア研究報告』　第6号　B5判　1冊(刊行済)

6. *Asian Research Trends.*　New Series　No.4　A5判　1冊(刊行済)

B. 論叢等出版

1. TBRL12 *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20th Centuries*　B5判　1冊(刊行済)

2. TBRL13　*Large and Broad: The Dutch Impact on Early Modern Asia (Essays in Honor of Leonard Blussé)*　B5判　1冊(刊行済)

3.『岩崎文庫貴重書書誌解題VI』　B5判　1冊(刊行済)

4. *Sources on the Mughal History*　B5判　1冊(刊行済)

5.『地図文化史上の広輿図』東洋文庫論叢73　A5判　1冊(刊行済)

6.『中国近世文芸論-農村祭祀から都市芸能へ』　A5判　1冊(刊行済)

7.『歴史的視野から見た現代中国経済』　　A5判　1冊（刊行済）

※6，7は出版社との共同出版事業であり、調査研究費から印刷費を支出。

Ⅳ．普及活動

A．研究情報普及

1．東洋学講座

（春　期）　共通テーマ「東洋文庫とアジア　-その1-」

第511回　2009年5月12日（火）

「雲南と東南アジアに跨るタイ系民族の世界を行く」

東洋文庫研究員

東京外国語大学AA研教授　　クリスチャン・ダニエルス　氏

第512回　2009年5月19日（火）

「満洲語の世界を開拓する」

東洋文庫研究員

日本大学教授　　加　藤　直　人　氏

第513回　2009年5月26日（火）

「倭寇と日本・アジアの交流史」

東洋文庫研究員

東京大学教授　　村　井　章　介　氏

（秋　期）　共通テーマ「東洋文庫とアジア　-その2-」

第514回　2009年10月27日（火）

「私の東南アジア研究と東洋文庫」

東洋文庫研究顧問

国立公文書館アジア歴史資料センター長　　石　井　米　雄　氏

第515回　2009年11月2日（火）

「東洋文庫の朝鮮史料と朝鮮近世財政史研究」

東洋文庫研究員

東京大学准教授　　六　反　田　　豊　氏

第516回　2009年11月16日（火）

「日本における山海経図－山海経絵と山海異物」

東洋文庫研究員

成城大学名誉教授　　杤　尾　　武　氏

2．特別講演会

9月24日（木）

“Modernity’ and the Mythic Imagination in Central Asia:

Legends of Origin and Discourses of Identity in the 19th and early 20th Century”

インディアナ大学教授　Devin DeWeese氏

12月10日（木）
「明代における銭糧徴収の運営と地方行政関係の変化」
北京大学歴史学系教授　郭　潤 涛 氏

1月22日（金）
「西域出土の戸籍資料から見た唐代の家庭構造」　清華大学歴史系教授 張　国 剛 氏

3月19日（金）
「イラン・イスラーム議会図書館資料センターの機能と役割について」
イラン・イスラーム議会図書館資料センター長　アリー・タタリー 氏
前パーヤーメ・ヌール大学教員　ファーテメ・トルクチー 氏

3月26日（金）
「バタヴィアの中国人公館とその資料について」
東洋文庫名誉研究員
ライデン大学教授　レオナルド・ブルッセ 氏

3．研究会（東洋文庫談話会）
3月24日（水）
「20世紀前期、上海の日系製革企業-江南製革と中華皮革」
日本学術振興会特別研究員（PD）　吉田 建一郎 氏

4．普及展示企画
2011年度からの企画展示案について、毎月部会を催し、検討した。

5．参考情報提供
『東洋文庫年報』2008年度版　A5判　1冊（刊行済）

B．データベース公開
2009年4月1日～2010年3月31日までの期間における、東洋文庫の図書・資料のデータ（日本語・英語）に対するオンライン検索アクセス件数については、別添資料の通りである。

V．学術情報提供

東洋文庫は、日本における東洋学の共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡に当たって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

A．図書・資料の閲覧（協力）サービス

数量／月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
閲覧者人数	164人	121人	186人	207人	193人	148人
閲覧図書数	3349冊	1568冊	2274冊	3039冊	2722冊	1847冊
レファレンス数	44件	33件	50件	56件	52件	40件

（次頁へ続く）

10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
155人	129人	145人	137人	131人	181人	1897人
2332冊	2269冊	2290冊	2079冊	1952冊	2391冊	28112冊
42件	35件	39件	37件	36件	49件	513件

B. 研究資料複写サービス

(1) マイクロフィルム・紙焼写真

区　分	申し込み件数
数　量	198　件

(2) 電子複写

区　分	申し込み件数	焼付枚数
数　量	820　件	47,505　件

C. 研究資料の覆刻・増刷の刊行サービス

東洋学報　第90巻4号	330部
東洋学報　第91巻第1～3号	各330部
東洋文庫欧文紀要　Vol.66	50部
『前近代中国の法と社会―成果と課題―』	50部
TBRL10　*The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the Nineteenth and Twentieth Centuries*	50部
『敦煌・吐魯番等出土漢文文書の新研究』	50部
TBRL11　*Development of Parliamentarism in the Modern Islamic World*	50部
『オスマン朝と中近世日本における文書史料の比較研究』	30部
『内国史院檔　天聡八年』	30部
『戦前期華北実態調査の目録と解題』	30部
近代中国研究彙報　第31号	50部
東洋文庫書報　第40号	20部
東洋文庫年報　2008年度版	10部

D. 研究情報提供サービス

英文刊行物の全文データを随時更新した。。

E. 広報普及

東洋文庫ホームページを随時更新した。

F. 研究者の交流および便宜供与のサービス

1. 長期受入

(1)外来研究員の受入

彌永　信美　（フランス国立東洋言語文化研究所 東京支部長）
「日本仏教」　（2009 年 9 月 1 日～2010 年 8 月 31 日、延長予定）

郭　　潤涛　（北京大学教授）
「明清時代の地方政府と基層社会の相互関係に関する研究」
（2009 年 4 月 1 日～2010 年 1 月 31 日、学振外国人招聘研究者）
［受入担当 ： 岸本美緒］

呉　　真　（南開大学大学院中文系講師）
「祭祀演劇中の儀礼文化に関する日中比較研究：宗教学に基づく文学研究」
（2009 年 11 月 25 日～2011 年 11 月 24 日、学振外国人特別研究員）
［受入担当 ： 田仲一成］

(2)2009年度日本学術振興会特別研究員PDの受入

吉田　建一郎（慶応大学大学院博士取得）
「近代中国の卵、獣骨、皮革を中心とした畜産品貿易に関する総合的考察」
（2007年度採用、3年度目・終了）

橋爪　　烈（東京大学大学院PD）
「支配権喪失後のカリフの権威：軍事政権，アッバース家，ウラマーの視点による再考」
（2008年度採用、2009・2010年度3ヶ年間）

澤井　一彰（東京大学大学院PD）
「16,17世紀のオスマン朝における物資流通とイスタンブル」
（2009年度採用、2010・2011年度・3カ年間）
［受入指導者：林佳世子研究員］

鈴木　秀明（東京大学大学院PD）
「インド洋海域世界の「近代」：奴隷交易の変容を事例にして」
（2009年度採用、2010・2011年度・3カ年間）
［受入指導者：蔀　勇造研究員］

木村　　暁（東京大学大学院PD）
「近代中央アジアにおけるイスラーム王権とムスリムの政治秩序観」
（2009年度採用、2010・2011年度・3カ年間）
［受入指導者：新免　康研究員］

2. 外国人研究者への便宜供与

Azerbaijian	KHALILLI Fariz [National Musium]
China	沙武田[敦煌研究院]　（ほか23名）
France	BUSSOTTI Michela [Ecde Française d’ Exhêne Orient]
Poland	UOCOOUcMCLYA Dotiua [University of Warsaw]

Russia　　MOLODYAKOVA V. Elgena [Russian Academy of Sciences]
（ほか1名）

Taiwan　　劉祥光［国立政治大学］（ほか2名）

Ⅵ. 地域研究プログラム

A. イスラーム地域研究資料室

「イスラーム史料情報学の開拓」

本研究では、イスラーム地域の現地語史料について、書誌情報や文献情報の体系化を進めることによって研究の基盤を作り、同時に史資料の体系的な収集や利用のための環境を構築する。史料群を地域社会全体を表す縮図と捉え、これを体系的・俯瞰的に研究することによってイスラーム地域の重層的な像を解明することを目的とする。

［研究実施概要］

a）現地語史料の体系的収集を行った。

b）文献情報ネットワークの構築・拡充のため、以下を実施した。

1.アラビア文字資料整理に不可欠な支援ツールの作成・公開。

2.アラビア文字資料所蔵主要機関の担当司書による連絡会の継続開催。

c）文書史料による比較制度研究を継続した

1.オスマン帝国史料の総合的研究（秋葉淳研究員）

2.シャリーアと近代：オスマン民法典研究会（大河原知樹研究員）

3.カイロ国際会議セッション参加（2009年12月）

「イスラーム地域研究」プログラムとカイロ大学文学部との共催にて開催するカイロ国際会議に参加し、「Islamic Judicial Practices: Globalization and Localities of the Law」と題したセッションを行った。

4.上智大学拠点グループと連携研究班「東南アジアのキターブ目録勉強会」が東南アジア諸地域にて収集したアラビア文字資料の整理法確立と精度の高い目録の作成に向けた勉強会を継続的に実施した。

B. 現代中国研究資料室

「現代中国研究資料の収集・利用の促進と現代中国資料研究の推進」

中国研究に関するウェブやデータベースに関する情報を交換し、研究者の知見を広めるために、国内外の研究者・実務家を招いての国際シンポジウム及び小規模なワークショップを開催する。また東洋文庫所蔵及び新規収集の一次資料に基づいた共同研究会を継続して開催し、資料の読解能力を高め、若手研究者の養成をはかる（年数回）。また、データベースや文献資料以外に、現代史研究に必要な資料の史料学的研究を進めるセミナーなどを開催する。

［研究実施概要］

a）デジタルライブラリーシステムについて、試用しつつ改良を加えた。同時に、公開対象とする資料を選定を、近代中国研究班（委員会）収集資料を中心に検討した。

b）NII-Webcatへの図書データ入力を進めた。

c）資料収集については、引き続き現代中国に関係する資料を収集した。

Ⅶ. 受託研究

「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」

（イスラーム地域研究資料室委託業務）

本委託業務の目的は、ネットワーク型共同研究「イスラーム地域研究」の発展によって、グローバル化した現代のイスラーム理解を深化・向上させ、その成果を学界及び広く社会に還元すべく国際的な広が

りを持つ新時代の共同研究拠点を構築することにある。また、共同研究実施にあたり、国内では公募研究を通じて幅広い人材の参加を促進し、国際的には研究者の協力のネットワークの強化を行い、さらに研究支援組織としても管理業務環境を整備・強化した事務体制を構築する。
財団法人東洋文庫では、イスラーム地域研究の史資料センターとしての役割を果たすべく、史資料の収集・利用の促進と、イスラーム史資料学の開拓に関わる研究開発を実施する。
[研究実施概要]
a)「イスラーム地域研究」の史資料センターである東洋文庫拠点の整備強化を推進した。
b) 継続的に和文及び英文で研究成果の出版をする計画を実現させるために、企画や内容の検討・点検や出版社との打ち合わせ等の準備作業を行った。
c)「イスラーム地域研究」の強化と公募による拠点拡大
1.公募採択共同研究班「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開:オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」(申請者:高松洋一　研究構成員:清水保尚、渡部良子、斉藤久美子)は、前年度の成果を踏まえ、国際的にも未開拓の分野である帳簿の史資料学的研究及びイラン式簿記術の研究を進めた。
2.中東研究文献DBの拡充を目的として、中東研究文献遡及調査を継続して実施した。

２００９年度財団法人東洋文庫特別事業報告書

財団法人　東洋文庫
理事長　槇原　稔

2009年度、財団法人東洋文庫特別事業の概要は下記の通りです。

事業内容

各研究計画に沿って、以下の研究活動を実施した。

Ⅰ. 特別調査研究並びに研究成果の編集等

A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

1. 研究成果公開促進費（データベース等）の対象事業
「東洋学多言語資料のマルティメディア情報システム」
［東洋文庫電算化委員会委員長：斯波義信］

2. 基盤研究等の対象事業
(1)「宋代社会経済史語彙解釈のデータベース化」　［研究代表者：斯波義信］
（基盤研究（B）、2007年度採用、4ヶ年間・第3年度目）

(2)「1910～1930年代における日本の中国認識−華北地域を中心に」
［研究代表者：本庄比佐子］
（基盤研究（B）、2009年度採用、5ヶ年間・第1年度目）

(3)「南インドの刻文に見る中世宗教運動の展開」　［研究代表者：辛島　昇］
（基盤研究（B）、2009年度採用、3ヶ年間・第1年度目）

(4)「抄物目録の完成」　［研究代表者：柳田征司］
（基盤研究（C）、2009年度転入）

(5)「近代トルコにおける西洋演劇の受容と伝統演劇」　［研究代表者：永田雄三］
（基盤研究（C）、2009年度転入・終了）

B. 三菱財団補助金による事業

三菱財団人文科学研究費補助金の対象事業
「“モリソン・パンフレット”資料集の学際的研究
−中国をめぐる近代極東史の一次資料の解析−」
［研究代表者：斯波義信］
（2008年10月～2010年9月・2ケ年間・第2年度目）